

はじめに

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターは、原型であるスラヴ研究室の設置から 61 年、法学部附置スラブ研究所としての正式発足から 59 年という、日本の地域研究機関としては有数の長い歴史を持ちます。この間の歩みはまた、絶えざる自己革新の歴史でもありました。それは、主たる研究対象である旧ソ連・東欧地域が、社会主義体制・冷戦とその崩壊を経て、複雑に変化してきたことに対応したというだけではありません。当初から学内外の研究者の協力のもとに設立されたという経緯もあり、全国に開かれた共同利用と全国的・国際的な共同研究に、何十年も前から取り組んできました。特に最近 20 年ほどの間は、さまざまな大型プロジェクトとも連動しつつ、旧ソ連・東欧地域の隅々にまで入り込む現地調査、他地域との比較を含む新しい研究手法の導入、査読制雑誌をはじめとする出版物の充実、大学院教育の開始、そして日本の研究の国際化と世界的な学界統合の試みなど、次々と新しい課題に挑戦してきました。

このような活動を折りにふれ総括し見直すため、センターは早くから点検評価に取り組み、1994 年を皮切りに、1996 年、1997 年、2000 年、2002 年、2006 年と 6 回にわたり、点検評価報告書を発行しました。これらの報告書は、センターの活動に関する資料、さまざまな形での外部評価、専任研究員による自己評価など、多様な形態・内容のものを含んでおり、今読み返しても啓発されます。しかしその後は、国立大学の法人化に伴い大学単位での点検評価制度が別途整備されたこともあり、センターは点検評価報告書の発行を休んでいました。

2013 年度、国立大学の第 2 期中期目標・中期計画期間（2010～15 年度）の半ばを過ぎるにあたり、部局単位の点検評価実施が北大全体として推奨されることとなり、センターも久しぶりに点検評価を行いました。前回の点検評価から約 8 年が経過し、その間にセンターの活動も拡大・多様化したため、田畑伸一郎教授、乾優紀子事務係長をはじめスタッフを総動員しても、ほぼ 1 年がかりの龐大な作業となりました。実に多岐にわたる活動をしてきたことに自分たちでも驚くと同時に、人手不足を思い知らされました。

今回の報告書は、分量的には資料が大半を占めますが、外部アンケートおよび外部評価を実施したことが非常に重要です。アンケートでは、共同研究員の皆様から多面的で建設的な意見・評価をいただきました。また外部評価委員の先生方には、ヒアリング実施時に本州の大雪で飛行機の欠航が相次ぐ中、大変な苦勞をして札幌に来ていただきましたが、詳細で有益な評価・提言を賜りました。厚く御礼申し上げます。この報告書が出版される頃には、センター長も次期の家田修氏に交代している予定ですが、いただいたご意見・評価は、一同で今後の活動に有効に活用していきます。

本報告書が点検評価の対象としたのは 2006（平成 18）年度から 2013（平成 25）年度前半までで、現況としての記述内容は概ね 2013 年 10 月現在のものです。業績など、年度途中での更新が難しいデータ・情報は、2012 年度までのものを収録しています。2014 年 4 月 1 日には、研究対象地域の多様性とセンターの活動の広がりや名称を反映させるため、「スラブ研究センター」から「スラブ・ユーラシア研究センター」に改称するという大きな変化が起きましたが、本報告書では、タイトルで新しい名称を使うものの、本文では基本的に「スラブ研究センター」を用いています。

2014 年 4 月

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長
宇山 智彦